

氏名	あおやま たろう 青山 太郎
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第960号
学位授与の日付	令和2年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学位論文題目	ポストメディア時代の映像制作における主体性に関する研究 ー東日本大震災における他者をめぐる想像力の生成過程についてー
審査委員	(主査)教授 池側隆之 教授 櫛 勝彦 教授 伊藤 徹

論文内容の要旨

本論文は、劇的に変化を続ける情報環境がマスメディアの特権的構造を解体する一方で、誰しもが情報生産と発信の担い手となる今日のメディア状況を踏まえ、私たちの〈見る〉ことのアクチュアリティを再考するものである。特にここでは、東日本大震災をめぐって特異な映像実践を行ってきた映画監督や芸術家ら複数組の作り手の表現過程を記述・分析することを通じて、作り手の主体性がどのように変化し、どのような想像力が涵養されるのかを考察し、現代の映像制作の意義を論じている。

第1章では、今日のメディア環境を分析する視座を獲得するため、第二次世界大戦以降に各時代を画期する「新しいメディア」の登場とそれらをめぐる言説の歴史を概観し、さらに加えて、かつて理念として構想された「ポストメディア論」の読解を行っている。特にここではマスメディアの隆盛、メディア機器の市民への普及、デジタル・テクノロジーとインターネットの発達の流れを確認することで、今日のメディア環境がどのように形成されたかを検討している。その上で、思想家フェリックス・ガタリが「ポストメディア」という概念によって想定した理想的な民主的情報環境のあり方を考察し、そこから「作り手自らの主体性の再編成」の概念を抽出し、その重要性を提示した。

第2章では、戦後の映像史において、探索的に対象を〈見る〉ことを試みてきた様々な作り手が「自らの主体性の再編成」を実践する試みを「リサーチング・シネマ」と新たに定義し、それらの系譜を読み解きながら、個々の作品における制作プロセスを分析している。ここではドキュメンタリー映画や民族誌映画だけではなく、記録映像を利用した実験映画やビデオアート作品も取り上げ、それぞれの運動の代表的作家の特性を考察した。またその上で「不在の対象」を取り扱う映像作品において顕在化する「フィクション性」の概念を検討し、〈作る〉ことと〈見る〉こととの関係を論じている。

第3章では、まず東日本大震災をめぐって立ち上がってきた様々な映像アーカイブ・プロジェクトにおいて、どのように〈見る〉ことが作動しているかを批判的に検討し、それらのプロジェクトを支えている工学的視点においては、〈見る〉ことの記録をめぐる創造性が見落とされている

点を明らかにした。次に、せんだいメディアテーク（仙台市）が展開している「3がつ11にちをわすれないためにセンター」を取り上げ、同センターが「記録を作ること」そのものを支援するというスタンスをとり、担い手の「分からなさ」に寄り添い、また彼らの「発見」を支援する様々な仕組みが考案されてきたことを明らかにした。その結果、プロアマを問わず多様な映像実践が行われ、また映像を囲む場が創出され、新しい公共的な学びの連鎖が発生していることが指摘されている。

第4章では、震災発生から間もない時期にせんだいメディアテーク周辺で活動をしてきた酒井耕と濱口竜介、鈴尾啓太、小森はるかという3組の映像作家の取り組みを検討し、彼らが既存の映画や映像制作の方法論の上に新たに構築したアプローチを記述・分析している。手法はそれぞれに特異なものであるが、共通して、震災という表象不可能と思われる出来事をめぐる「未知のイメージ」を探求し、「自らの主体性の再編成」を実践することで、新しい〈見る〉地平を獲得している点が明らかにされている。

第5章では、ここまでに論じた「主体性の再編成」のプロセスにどのような構造があるのかを検討するために、言語学における「中動態」概念を参考に考察を行っている。「中動態」の、「行う」でも「被る」でもなく「巻き込まれながら為す」というあり方はすでに芸術学においても注目されている。この立場を援用しながら、とりわけカメラという特殊な機械を必要とする映像制作においては、ひとつの作品制作において中動的過程と能動・受動的過程とが重なりあう「複眼的中動態」と呼べる事態が生じており、それが重層的かつ拡張的に主体性を更新することで「未知なるイメージ」を〈見る〉という現象を創出させていると論じている。

終章では、映像を介したリサーチやものづくりのアプローチは、〈見る〉力、すなわち未知なる他者への想像力を賦活し、アクチュアリティを失った「この世界への信」を再創造させる可能性を有していることを指摘し、このような力は専門的な訓練を受けた芸術家やマスメディア関係者の活動だけではなく、より幅広い層の人々による表現や批評、またコミュニケーション活動の深化を促し、多様な他者との共生を可能にする社会のデザインとを架橋する理論の構築に資すると結論づけている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、マスメディアを中心とした情報環境が、技術革新によってもたらされた個人の手による情報生産と発信を可能とする環境へと劇的に変化を遂げた今日のメディア状況を踏まえ、主に映像を介した創作における「見る」と「作る」ことの相互作用を東日本大震災での種々の実践を例に考察するものである。

本論文の特徴は、1. 映像史上の記録をめぐる実践を新たに「リサーチング・シネマ」とカテゴライズ、2. 災害記録の伝承や震災映像アーカイブのあり方、3. ポストメディア時代の映像制作がもたらす意義、を考察した点である。最終的にはこれらの観点を統合し、映像を介したリサーチやものづくりのアプローチを見る力、すなわち未知なる他者への想像力を涵養する方法論として確立する重要性を説いている。

映像の本質的機能である記録性は、記録者が現実に向き合うことを促し、その作業を通じて現場に潜在する価値を浮き上がらせることに貢献する。申請者は20世紀半ば以降の多様な映像記

録実践を「リサーチング・シネマ」と位置づけ考察の枠組みに設定しており、その点にまず独自性が確認できる。それを踏まえた上で、SNS等で見られる映像コミュニケーションが遍在化する今日のメディア状況を精緻に検討している。そこでは、作り手は単に既存メディアの枠組みの中で流通する「フォーマット」に沿った創作を行うだけではなく、彼らを取り囲み、その行動の尺度や形態に作用を及ぼしているメディアを十分に理解することで、その環境に身を置きながらそれを相対化し、未知なるイメージの生成を試みる現状があることを、作り手らへのインタビューや映像分析を通じて明らかにした。それらの知見は、表現上の独自性を探究する映像作家らだけではなく、東日本大震災での市井の人々のメディア実践を再解釈することに寄与している。すなわち、出来事に対する「自らの主体性の再編成」を促す実践であると分析した点は、マスメディアの「受け手」の実践が、専門家らによって精緻に体系化・管理化されたマスメディア環境や工学的観点が主導する震災映像アーカイブの現状に転位、応用、拡張される可能性を示唆しており、そこに本論文の新規性があるものとして評価に値する。

以上の評価から、審査員は全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。

なお、本論文の基礎となった論文は、3編の査読付論文(①, ②, ③)、1編の参考論文(④, 査読無)で、いずれも申請者が単著者もしくは筆頭著者である。

- ① 青山太郎「映像表現における〈再現〉と想像力について—アーノウト・ミック(段ボールの壁)からの考察—」社会芸術学会『社藝堂』第3号, pp.55-78, 2016年
- ② 青山太郎「ポストメディア的映像生態系をめぐる試論—ガタリにおけるメディア・テクノロジーと実践の位置付け—」名古屋大学哲学会『名古屋大学哲学会論集』第13号, pp.54-77, 2017年
- ③ 青山太郎, 高森順子「災害の記憶伝承における映像上映の創造性—『波のした, 土のうえ』をめぐる対話の場について—」名古屋大学大学院国際言語文化研究科『メディアと社会』第9号, pp.19-36, 2017年
- ④ 青山太郎「中動態の映像学の可能性をめぐる試論」中部哲学会『中部哲学会年報』第51号, 2020年(掲載決定)